

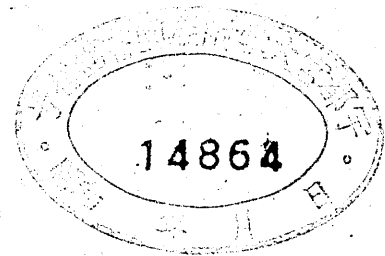
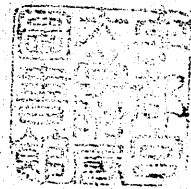
武野燭談

C2108
13

宇都宮大学
附属図書館
大川
154

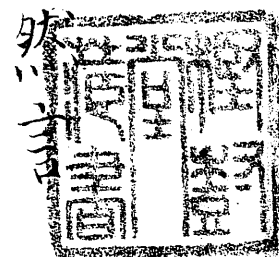
大川家
154





武野燭談序

曾聞言者心之聲而行者心之跡也



與行必待記者而其心可傳于後世矣
惟

本朝之文獻世世炳煥可仰可傳矣唯所
惜者街談巷說不能無漏脫古人之心將
有熄者也且人自非大賢不能無少疵自
非下愚亦或有一善苟取其善而去其疵

則常有餘師歟僕武事之暇拾搜慶長元
祿之際君臣之謹言卓行在口碑者以國
字綴之私號武野燭談以自當韋絃矣真
偽錯難以謬傳謬未暇詮擇暫存草稿耳
於乎古人言行如金如玉而易至湮沒者
存于俚言他日獲大方之琢磨而後百鍊
之光連城之美其聲益遠其跡益偉則將
不熄于萬世歟是所以忘僭踰也

武野燭談

凡例

- 一 東進宮の御令みよるにきくひし武家諸君の著る故君臣合辭の後論
其凡貴武家の秘鑑なりけりしより以て本多加倍松永大進入道伊豆道赤松の
私記を増くべきを略し終るものも秘文とす
- 一 將軍家より世子の御講問文よりいへとも國事と和書の古風と記し是をあら
わくはにきく
- 一 君臣後伯野英信氏婦人龍名朝臣大抵千石を領しといへる事なきに
しすきよのい其編次より拍りしききとて又その年編次相文するたきい
は朝臣の厚くおるものなり
- 一 武家の古實我々の相傳へる事傳ふとてかきしきし相傳ふところの歎談
をあけく一説とす

一 紀年正誤序を以ては前なるが如きもの但其人を論ずるのた
方難篇あり

一 引歌の難くやれりといふ人々を説き能く傳へり人々あるれ
る事明かすに神ありといふ人の難い事なりといふ事
あり

一 是書文部を以ては全書に随ひて多しを我門のいふ事なりといふ
事あり

武野燭談

今巻二十卷

目錄大概

第一

一 左衛門豊后より

東照宮大なる一役ははるやと作合せし
大御君よりある事

一 大坂の城築きしは秀吉公の御目候より日本の人数を数へりとも持津の
國を以て城ははるや、秀吉公一役ははるやと作合せし

東照宮御挨拶ありし事

一 東照宮の梅のり 今使院殿の梅のりといふ所ののちの人の心をな
かす事

一 東照宮の御作ししは右左衛門督尾張殿常陸公紀州殿此所は人々御

具々之初の作はされし阿波将人等の事

阿波将評と 阿波相違や事

一 伏見城の退進不日事 阿波の将を引んとすを
大抵是神意の事

阿波近所の事 人代七日とく首達といふ事

一 大抵是神意の事

一 慶長十九年の辰春日の祓とす 阿波の将一と云ふ事
阿波の初使渡府とす 阿波の将一と云ふ事

大抵是神意の事

一 東照宮作す武家の大将軍の之を阿波の将一と云ふ事

阿波 治礼の事と成る事

一 東照宮作す天下の会堂の如く作れ事

阿波 阿波の石武に廿万石又いふ四万石の領事

阿波 阿波の武家の事

一 東照宮作す私欲多き将と國郡とある事

阿波 執柄と云ふ事

一 東照宮作す阿波の令親の如く武家の将の如く作れ事

一 東照宮作す國郡ある人事と作れ事

阿波 阿波の松と云ふ一伍人を置きたる事

阿波 二

一 東照宮作す阿波の令親の如く武家の将の如く作れ事

阿波 國郡を治る事

一 東照宮政道の如く阿波の政の如く作れ事

阿波 阿波の將帥(拂)と云ふ事 阿波の將帥と云ふ事

たうらうとて人々を作らぬ事

一 又作は天下國家を治る用事の時不用の時時侯の時とて用ある事
作れ事

改 又老及は月日の事

一 又作は忠臣の忠老をいふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事
ののいふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事
批判ある事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

忠臣と

一 又作は父子の事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

一 又作は忠老の事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

一 又作は忠臣の事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

一 又作は忠臣の事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

一 又作は忠臣の事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

改 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事 忠臣とて忠臣といふ事

一 東照宮作は古事なり清くけの事

附 古事なり事 腐るに捨てる事

一 又作は二方の事なり清くけの事

附 命の長短を懸けたりと云ふ事 國を治む事 又人の事

公卿

一 東照宮作は武家なりけの事

附 老臣執事なりけの事 清くけの事 人なり

年ふ事 清くけの事

一 又作は老臣執事なりけの事

附 一に時なりけの事

一 又作は又老臣執事なりけの事

附 清くけの事

一 又作は清くけの事

附 是利執事なりけの事

一 又作は人なりけの事

附 親親執事なりけの事

一 又作は親親執事なりけの事

附 是利執事なりけの事

一 又作は武道執事なりけの事

附 是利執事なりけの事

一 又作は人なりけの事

事

附 清くけの事

一 又作は人なりけの事

一 陣 いたちのやまなる事 一 出ををれぬ事

一 東照宮作の事 一 一

陣 東光の事 一 一

一 又作の事 一 一

陣 任職の事 一 一

一 又作の事 一 一

陣 我々の事 一 一

一 東照宮御事 一 一

陣 東光の事 一 一

一 御事 一 一

陣 又吉我の事 一 一

一 東照宮信玄の事 一 一

陣 神君我の事 一 一

一 左同秀の事 一 一

陣 徳川殿の事 一 一

第 二

一 徳川殿の事 一 一

陣 大名の事 一 一

陣 大名の事 一 一

一 徳川殿の事 一 一

一 東照宮の事 一 一

一 御使を以日光と改めしむ奉幣使勅する事

一 大相國為元より一々河内相國を以て河内縣の鴨と改めしむ事

一 大相國宗廟院殿より移し一々河内縣の鴨と改めしむ事

一 但大相國殿より河内縣の鴨と改めしむ事

一 公使院殿より河内縣の鴨と改めしむ事

一 家光より一々河内縣の鴨と改めしむ事

一 東照宮竹千代殿國千代殿河内縣の鴨と改めしむ事

一 竹千代殿國千代殿河内縣の鴨と改めしむ事

一 酒井家世に忠世と竹千代殿河内縣の鴨と改めしむ事

一 竹千代殿の補佐の事

一 家光より一々河内縣の鴨と改めしむ事

一 見よる大相國他界の事

一 酒井家世に忠世と竹千代殿河内縣の鴨と改めしむ事

一 大相國他界の事

一 松平家世に忠世と竹千代殿河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 河内縣の鴨と改めしむ事

一 酒井澄俊が忠告を原下とす事

一 家老の老后以下に及ぶ事

一 山田清隆が、伊達に老后をよす事

一 家老の老后に及ぶ事

一 老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 伊達に及ぶ事

一 伊達に及ぶ事

一 伊達に及ぶ事

一 伊達に及ぶ事

一 伊達に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

一 家老の老后に及ぶ事

松本公康の事

附 弟はるゝの事

一 同御代より松本公康の御事所よりなされし事

附 大御代より今く願ふ事

一 松本公康の御事所よりなされし事

附 延壽院通と吉田宗茂の事 毛利公康の御事所よりなされし事

一 常徳院殿松本公康の御事所よりなされし事 延壽院の御事所よりなされし事

附 法令の事

一 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事

一 元禄二年十月十七日の大災松本城危き時 松本公康の御事所よりなされし事

附 小石川の別業の事

一 元禄二年の頃野分松本城の事

附 松本公康の御事所よりなされし事

一 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事 松本公康の御事所よりなされし事

一 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事

一 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事 松本公康の御事所よりなされし事

附 松本公康の御事所よりなされし事

一 家老の御志を所伏見し奉る御親王の娘よりくさくさお月列の殿
しるしをさす事

変化のふく女中なす事 御意所乳表煩さす事

一 桂昌院殿に侍る方僧に良きと人の坊に渡す事

方僧正の方家とあそぶ事 桂昌院殿に侍る僧の事

一 越前守門秀康の事

かき入れた事 承久天皇の御事 元安の御事

第七

一 松平下野守忠吉 後藤 麻呂 氣智の天下法をけりて今も侍る事

家康より伊豆の少輔より成る事

一 細川越中守忠興の信白をきく事 刑部卿の事 松平下野守

忠吉の事

下野守忠吉の事 松平下野守忠吉の事

一 尾張方朝義の事 松平下野守忠吉の事

志水加賀守の事

一 河内守藤田内膳の事 松平下野守忠吉の事

一 紀伊大納言頼朝の事 松平下野守忠吉の事

河内守藤田内膳の事 松平下野守忠吉の事

一 頼朝の御志を所伏見し奉る御親王の娘よりくさくさお月列の殿

しるしをさす事

一 河内守藤田内膳の事 松平下野守忠吉の事

河内守藤田内膳の事

一 本林義信の事 松平下野守忠吉の事 松平下野守忠吉の事

松平下野守忠吉の事

高まるの意をこたへし事

八

一 水戸中納言頼房の御事

御之家を賜ふ落し長門と御度と田新と帝主改事

一 尾張大納言友成の御事

親田親事御事

一 水戸人倫の御事

千代姫君の御事

一 酒井御家より通ふ御事

中納言光成の御事

一 尾張中納言細川氏に下る御事

一 尾張中納言通ふ御事

吉通の御事

一 水戸光國の御事

附 林妻女との御事

一 水戸人倫の御事

頼房の御事

一 光國の御事

豊後守の御事

一 光國の御事

牧野守の御事

成貞の御事

一 水戸人倫の御事

菊千代殿對學事

附 法政の實地練習の事

我亦寧同夢白於信法之安事

忠直公集申
申
申

一 諸人、志を統一せしむ
將軍、命を以て之を
討つ

卷九

一 松平鐵前之酒事

寛文中之ちちよふ事

堀田之野女に信を奉る所を今も在るに松平載重の
持造

戲齋稿

保科正信中將之妻

保科 初之 幸 今 後 以 事

肥後守之流令老后打寄吟草稿く巻下事

肥後忠法公活刺あり事

紀伊曾西之其の別業を大坂のあね八たゝの佐藤平右衛門吉川市に於て安養の

此等之大目改役同改中目改役一事

保科肥後守心容肥後守心容家督以第の事

同人たちの酒井 敏子 尾崎 士郎のなほ佐治とて関心事

一 市村公作子嫡流即地——津山の城より仕方事

松平義興直明酒井教廣佐也國田村左衛門美遠助の事

一 松平定房 総長 定房 部 将 本 城 彦 子 幸

同入家自白水章仁質保彌九帝章

一
松平兵衛右衛門 喜作 葵の御紋 清満 子孫 一門 人々 繁栄 するなり

兵部左衛門少輔の除いさうの事

水戸参府の兵部左衛門の事

一 兵部左衛門の除いさうの事

附 御領代官の御定まりの事

重臣の御定まり

一 同 上野中津大津の御定まりの事

小使の御定まり

一 水戸参府の御定まりの事

法部省の御定まり

但水戸参府の御定まり

第十

一 御領代官の御定まりの事

御領代官の御定まりの事

一 御領代官の御定まりの事

一 御領代官の御定まりの事

一 御領代官の御定まりの事

一 御領代官の御定まりの事

一 御領代官の御定まりの事

御領代官の御定まりの事

一 御領代官の御定まりの事

御領代官の御定まりの事

一 寛文三年左衛門少輔の御定まりの事

御領代官の御定まりの事

第十一

一 酒井頼繁が越前守大膳利勝に慶賀届け籠城を命ぜられた事

一 大膳君と酒井大膳利勝との争ひ事

附 大膳利勝の死事

一 伏見の乱と酒井伊兵衛の捕縛事

附 酒井伊兵衛の捕縛事

一 本多中務左衛門忠勝の事 初鹿野留の義理事

附 蛸切と大膳の事

一 大膳右衛門の捕縛と酒井大膳の討死事

附 大膳右衛門の捕縛事

一 大膳右衛門の捕縛と酒井大膳の討死事

一 本多平八郎忠勝の事

第二十二

一 柳原式部左衛門康政の事

附 伊賀に本が焼く事

一 徳川家と秀吉の縁を結ぶ事

一 内蔵の徳川家と秀吉の縁を結ぶ事

一 高田の事

附 中山の事

附 戸田の事

一 牧野左衛門父子の事

附 大久保の事

一 本多上野の事

附 目黒の事

一 本多上野の事

根来法師百人成敗ありし事

一 成瀬隼人正智謀九鬼長門の事

一 井伊兵部少輔正政智謀其伊奈図書忌元福徳たてを我意附井伊文
佐友兵衛忌候の書をいふ事 謀の事

一 忠勝曾を解成し難くおもひし事 附 忠信の男を二男
忠朝と譲り端より忠信の角の男を譲る事

一 井伊中多の法加増より其の法傳へし事

永井右近を更なる人知通の事

第十八

一 永井右近を更なる事

永井忠勝長田何某の事

一 安房守刀吉次 永井右近を更なる事 永井右近を更なる事

一 池田輝政の宰相 大井君清算と成初く傳へし事

永井右近を更なる事

一 福徳たてを改易の上使永井右近を更なる事

以上原田君より破滅の年より仕立たる事

一 福徳たてを改易の上使永井右近を更なる事 附 忠信の事

一 酒井保徳を忠行大坂の事

一 井上之次正統家系の事

井上之次正統家系の事

一 井上之次正統家系の事

酒井山城守正統家系の事

一 酒井山城守正統家系の事

第十九

青、仙老寫忠僕機腰
松平伊豆寫信忠僕機腰批判之事

女御入内侍利意云并大炊取利緒下意事

井伊掃部頭忠孝入部仕任之事

家僕園中助諫公之書

何某家辰已亥

小荷夜更香

御隠密御相渡の序と古井大膳改利後為御用を以改事

亡并 方塘 利後 坊田 加害 爲二 成令 月明 後僧 校の事

堀田が望むに望む月日の秋久人な事を語る事

酒井隆政志願於駿河大納言家名其子為事
附 名長久事

新海の伝承を以て、心勝血脈と云ふ。傳傳長英と戒師の附屬と云ふ。

福地屋の角の光と漆

蘇州出物之重隆殉死之是伊等重友以不教於集之應州之事

酒半歌樂頌忘世榮名長以脇名爲人壽

皇元公御下二の年倭より厄拂くと云義持されし事

福葉丹 存古正通 諸日 厥仕要事

個在唐代初年已爲人所遺致也

駿河大納言家・濃勢中納言家より道中の節遣恨大智及び時去抄

大燭令和解事

第二

去升大始以利誘聰明者松年伊與否信然之應列の事

盜賊官廳諸役職と執務職と核對の事

東福門院の御所より松平伊豆守倭寇石の事より十一年の御勤ひ殿

心より、伊豆の能く、清波美云、御の事

伊豆子後奏自懷酒井室下(地)修(室)伊豆を可(事)

一 松平伊豆子(知)事

家結(沙)元腹(方)納言(任)これ(沙)願(各)作(事)

一 紀伊大藏(知)事 上(意)の(沙)結(新)供(事)

附 光(后)返(答)あ(事)

一 伊豆子(任)結(新)供(事)相(根)根(本)坂(付)果(新)我(事)

一 將軍(家)朝鮮(の)馬(系)客(邪)奏(子)河(事) 上(意)の(事)

信(結)下(知)事(事)

一 上(意)の(付)山(城)を(知)事(知)事(事)

一 井伊掃(頭)氏(浦)井(勝)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

上(意)の(事)

一 井伊掃(頭)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

免(加)恩(の)事

掃(頭)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

一 古(倉)但(馬)古(敷)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

一 板(倉)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

内(務)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

第(十)六

一 大(坂)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

附(同)人(知)事(事)

一 貴(人)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

上(意)の(事)

一 加(友)氏(志)勝(志)雲(知)事(知)事(事)

附(同)人(知)事(事)

一 堀田が参上盛怒を蒙り掃部長口之事 板倉月信も松平の死に批判

一 知恩院と志保原を争う事 板倉月信も重宝に判り之事

一 板倉月信と重宝を争う事 酒井を信濃志保原に試す事

一 將軍家御不例の節法代板倉月信も放智を事

中根を放智の事

一 井伊掃部長と志保原を争う事 信濃板倉月信も争う事

廣安以来の事

一 紀伊大納言板倉月信も志勝出り之事 掃部長と志保を争う事

一 家細公御代初松平隆興も百石の位に昇願り之事 松平の事

井伊直孝隆興も争う事 志保隆興も願う事

第廿七

一 阿部封馬も重宝に死の事

信長死すも不殉死の事

一 松平伊豆も阿部も死す事 九郎重宝を擲る事

一 尾張光友も知事の酒井も志保原を争う事 志保原を争う事

伊豆も死す事

隆興も志保原を争う事 成瀬康人に成る事

一 月八日板倉月信も死す事 酒井も死す事 小浜城下板倉の事

一 酒井隆興も志保原を争う事 小浜城下板倉の事 有馬元忠も死す事

代りも死す事

一 土井左衛門利勝も死す事

月八日板倉月信も死す事 志保原を争う事

一 安永十一年上洛の事 中津川外洛中板倉月信も死す事

一 安永十一年上洛の事 中津川外洛中板倉月信も死す事

一 井伊直政直政の弟父の申付直政より上ははる者候と云ふ
居りてある事

一 酒井勝政と志願見持事月日候の事

一 田嶋子候事

日吉の林野にたき火を焚く事

一 松平伊豆守の事

附 佐治大老の事

一 松平伊豆守信綱二十所とく八蔵の付り候事

附 十八

一 古殿但馬守の事

附 佐治大老の事

一 酒井勝政と志願見持事

一 明暦元年焼亡事

一 萬治年中大火事

將軍の御事

一 酒井勝政と志願見持事

酒井勝政の御事

一 寛文八年大火事

酒井勝政の御事

一 豊後守忠秋捨子捨り事

酒井勝政の御事

酒井勝政の御事

一 同入陽居前御事

一 稲妻と虎の御事

同人麻生法總より恨を感ずる事

第十九

一 酒井清盛の忌服満三年満ちて忌服を止む事

附 久米の儀の事

一 遠江守秘蔵の二日月と馬を忌服する事此等其事大略の事

日吉神社の事

一 古殿但馬守酒井修理長忠直様式に法月有一切の事

修理長殿中より法月を乞ふに掛抄の事

一 酒井清盛の忌服評水野周訪の事

附 板倉周膳の忌服戸田越前守の忌服此等忌服の外甲斐左衛門

水條安房守も多分の忌服の事此等忌服の外

一 板倉周膳の忌服又野間三竹法眼受業初より二文字願の事

重矩大坂東様より法月より忌服の事

一 同人酒井清盛の忌服又酒井修理長忠直の忌服の事

一 同酒井清盛の忌服又酒井修理長忠直の忌服の事

一 同人先食此の事并奥方法式の事

一 堀上守新堀上守信成少将新左衛門光政と同様に堀上守光俊

信成少将より信成少将の事

一 堀上守信成少将の忌服又堀上守信成少将の忌服の事

一 堀上守信成少将の忌服又堀上守信成少将の忌服の事

一 堀上守信成少将の忌服又堀上守信成少将の忌服の事

一 久世大和守の忌服又久世大和守の忌服の事

第二十

信成

堀上守信成少将の忌服又堀上守信成少将の忌服の事

一
仁同秀吉と遠忌松の地といふ人法寺執行方と
極念法席破り事

板倉月翁書 重宗父伊賀守俊茂直工
你件事

一 周防の公事 批判を東尾の長を尋ねる事

月宿書評定可也裁死必為事月宿書法合也

乙巳年大業決分事

一 公令家司公事判用訪考の事

と家振合々々家司丁右の勝利を裁り各陣の事

第二十二

板金月信寺 墨宗
板衣新腰 勉を理子老に破却 附
近海殿下

知事

一 月入京郡留省の院屋何某は妾の毒

周訪書侯義涉兒郎事

月詭譎院を死刑に付しを法人批判の事

松平山城を勝降用詔を機腰におさへて

一 牧野佐瀨が萩成令尹の次、尾東老臣の内に、板倉内膳と黒田と洛中事

東於新成屋在魚者後之寺以之爲橋爲寺十在魚

分心内法正生後悔事

震筆御題并願セマリ一書

虎溪改事

一 大正相模改正並命令の能讀近代史改の事

一松年因痛雪無訪自代成時極家流允名家羽林子外都察院

この巻

小益系依源寫長好諺曰代松年紀堡信激（）海留後事

依後書之入門
中流之事

松平紀伊守諸自職初々妙心与旁々對面迎客妙心与立腹の事

紀伊をきく返答よく長老入事

一 横濱修法紀伊をきく事

紀伊を周東（不家親）く復奏事

第二十二

一 秋元但馬を春朝氣修事

寛文戸田山城より下事

一 大地震の頃但馬を春朝知く水道の梅損事

一 新建の地所吟味の浪水野を春朝志意下事

牧中備後を成貞より月桂院事

一 阿波島作を武哉に春朝年論を数言く小栗名好者事

一 松平備前を彼一生心持事

閑居幽栖を好く終意を秋の信備を年談あり事

一 松平甲斐を信輝を各地好味事

寛文のころの日光御免のし国使はあつて死耳自に終る事

第二十三

一 酒井清政を忠直氣候の家風は事

月人内門の時馬の口をいれ事

一 酒井河内を忠直平生心息の事瑞子同通に忠直より父より父より梅損事

一 本多龍也を忠義我意を茶屋店のはま相の名取事

附子男龍也をいれ事

一 阿波島作を武哉に春朝年論を数言く小栗名好者事

一 堀田と野矢の儀事 附酒井玄平忠直氣候事

堀田家春日の月録事

一 加賀島殉死の時延刻を春朝より下事

酒井河内忠舉 帝極遺命不令養松平氏於小幡氏辰安留而令

第二十四

戸田能光也真后号山城守松平定清吉保領合戸姓と小笠原護平何某

百姓事必從焉
市橋橋亭
落成時
御筆
判
乃有
金

一 同父山城と七昌共隋老賊のく能気志志去有秋有仍成父子公
役有相後なり事

一 源 遠 乎 志 遠 丁 寧 生 愛 の 事

何人求公條原何某元朝之元事

一
月
騎
時
流
痛
中
有
事
於
本
方
太
燕
事

同人高田馬術博士書

一
月念後為懷小憫。——重病猶。二叔原佐石門。忠國廿年十歲。
省高涉順。於遠。江。對。面。事。

一 稽系伊勢も正能然死に成来吟味同姓要徳亭以下相徳の事 兼 左田
振津子浪久次知徳の事

たかひにあまきふたつていふこと

一
 常清智慧くお夜書きたる又漢書なり

一 福多ふはまに正体古河か將に後を客中より水戸相公光圀公
不審の事

第二

細川和泉守有る路次ゆくゆき人馬徒の者とあまふ満五板の車

一
伊達重作与村松麻柳庵主（即跡方町）古笔町より法華院に書かざる

一 伊達長遠 爲子宗途申之 湯嶺平何某と大書し及付書宗家
目大反何某働之 宗途申之 事

一 松平陸奥守忠宗伏見を湯城に召し、新組附の者割、時彼志宗
を召すべく切事。

附 彼志宗死松平伊豆守信紹を召し、信綱格好の事。

一 夜堂和泉守高久津井の屋敷に、小石川を築け、松平八郎大進と
久松守重勝及び、時より久松守重勝の事。

一 湯藩におもむき、湯中へ、湯長何事、争論の事。

一 堀田伊豆守正虎と氣負心ある事。

河野松平門外、若月仙童と、湯師抱り、松平忠宗を湯松平
守子とある事。

一 正虎守人、松平の事。

第二十七

一 湯府中城に湯府の時、松平忠宗の和泉湯入、松平忠宗、在府中。

附 湯夜話、上佛道の事、やうな事。

一 同日、湯府御城内、泉水、阿比川の水、湯を、松平忠宗、水通、
之、傳、ある事。

一 家康公、傳、ある上、湯、湯、ある事。

一 同時、湯、湯、湯、湯、ある事。

一 家康公、湯、湯、ある事。

一 家康公、湯、湯、ある事。

一 家康公、湯、湯、ある事。

一 家康公、湯、湯、ある事。

第二十八

一 家康公、湯、湯、ある事。

のまゝしむにむきもなきに拾へんとすまゝ世もたなみの誠ぞとぞし
らぬ事れ多るを御折我朝の首保元平治より父の恩義
礼を治来共和より君臣の禮をうけし義人けりそと道り
け百餘年建武一統の後信の帝東武長の有となりこのふの
たけくいさゝののまゆけに仁義の勇と大い忠意にみま
國の風俗は成くまゝの法令も用ゆる國より人の通すまゝと
まゝ慶長えむの治もれ武徳盛し君臣礼節も天よりそ
すんぞより人論の正を帝より御代よりなれり
東照宮の議創ありしに大相國の御海は議刑に徳をいふ
三代將軍の勇もなれど方家とすまゝより徳に仁政を施
しありて天下下りれりよりよりやむのかき誦をうたれ
りまゝ去後と應にゆりしにまゝ若衆をいふ大國をなす一統まゝ

あこころにも東隣をいふに相を用意する心清かゝる名をいそ
むはしむと大國をいふに東照宮は作念するも初め
のたりぬとて義とて義乃五所人かやいふこいひりれど
神君の言ありしにや秀吉の機を第一とせむとありしに朝鮮
征伐を思ふにまゝなるは是におつて日本の肥後思ひする人の
心味すしとありしをやま長後にも記されし事なりは
しと節ありしに法をいふとあれしにの記するなり
一 大坂の城は築きし後秀吉をいふ日懐き日本國の人をまゝ
とも振津國をいふ城は築きし後秀吉をいふ日懐き日本國
東照宮もそこをいふと法をいふと秀吉をいふと作念する
秀吉をいふとありしとありしとありしとありしとありしと
法をいふとありしとありしとありしとありしとありしと

寧ろこれ米然と云を志す一免されざる湯味方や味の遠い
くは殊さうくさう増田長米抄也湯飲をやり何と判り
らんや人さうと多岐就きておれ加賀浅野が辰上杉長方
むきくそ祓の湯煮を志す一免さうやめられ天下統一統の後
院人さうとくはたふたふた國々の諸侯衆勅と祓さうい信信
さうとくはたふたふた作され百尋られさうと事さう思ひ
さう方のさうとくは立派さうと聖教の今も今見れは浅
志られ放せしこれ君長或子の恩おしとらむけさう諸國
知さうとくは言箱成唐くはしと社に改められと初め
日かそ世時和板刻さうと官刻は書と經記傳の言箱成さう
板刻はさうとさうと世時和板刻は書と經記傳の言箱成さう
ゆさうとさうとや去社は時時さうと初めは書と經記傳の言箱成さう
注

用ひられしは通春うす八時 漢中さうと論議と初め漢やを明
鍾家博士又抄さうとん古伝の書漢原抄業の訓意さうと天子
七代の侍讀は漢中さうと清原良技四代の教業さうと毎橋家
祖られ漢中さうとさうと漢席と家と漢又初めはと用さうと
さうとさうと公家とさうと外あるさうと 大和君さうとさうとん道さう
唐く道さうと元勝孔門のさうと古伝さうと漢唐の古伝をさうと用
さうとや千載の後さうとさうと理られ明徳さうとこれ程は後とさうと共
信は漢子の漢席とさうとけ無記ありさうと打續洛陽さうと風
改さうとさうと開東さうとさうと是利の學校と初め漢さうと後又さうとこれけ
管朝長さうと末の抄言奇丹京都の信信のさうと入く既さうとこれけ
一通春さうとさうとさうとさうとめくさうと校再無ありさうと然れさうと中漢
さうと今と漢家の有と成さうとさうと或をさうと治られ世の事とさうと

の武家此の儘に龍賦のいふ武備をきりあつて武法
不業内なるもの恥をさす能成さるるも我理をきく義理を
も人の虚言より遠くきくもの懐痛より後こそ者の心を傷
やすい事ものいひやすかのか武之法もたのむる事歟
いかにいふもたす能れも此のたふれがきかたやたとひ親
族とふも早くほうふも武道の眼をみくある事いえず利貞
とあく軍令法を恥と改選をきく文武の二法をきく武家代
勤のものを月也——よは事とす

一 東照宮の作は天下いそひ合完の——源平後橘の四姓のこころ
屏の羅等あり是則家の口陽のたかり信は礎より傳へるをさす
ねをいふ極ねとふきく思ふ——大將相非道の村入くはる時
家のきり分るすも大將の恥なる事也治は家老の心持あり

口陽のたかりいそひ合完の——源平後橘の四姓のこころ
屏の羅等あり是則家の口陽のたかり信は礎より傳へるをさす
ねをいふ極ねとふきく思ふ——大將相非道の村入くはる時
家のきり分るすも大將の恥なる事也治は家老の心持あり
己をたかり傳へ用ひさる——家老の口陽をいふきく世諦あれ
公家武家いふは武家の恥なり。あつては家老をきく
口下其位は居す——君の度は列——君は其位を下りく口陽の恥ある
時、あつては武法とこれの口陽ありえきをきれといふきくあつた
周東の久家千利胤とこれとつる方居る傳へ家老の原は千
万石はふを恥なり——原は家老の傳へ信長の方とつては千石あり
近き傳へを傳へるも是を千石一人——信長は滅亡の事いふは
相違ふ千石と原は武家の口陽なり——今いひくは武家の恥
松別のたかりいそひ合完の——源平後橘の四姓のこころ
屏の羅等あり是則家の口陽のたかり信は礎より傳へるをさす
ねをいふ極ねとふきく思ふ——大將相非道の村入くはる時
家のきり分るすも大將の恥なる事也治は家老の心持あり

す是は公家武家諸、機分と守所武道、而東国の武士我々と
くも用ひさやうや事、たゞしくの上意なりと

東照宮様は私欲多き將國政をあつて事をなされ早く百放す
むほをふも逆臣とてやゆふ何ぞやぬ欲やう出さるゝ又依怙具
天下のこれの大根えなり親族類紫といふも賤き氏にこそ
上と居くゑと理をこへくこそとて理は随ふ大將の徳を明
くす所なりやたと今川義元臨み寺の雲井和局をお清く
のはななりと國は治るゝれも孝老の威なりこれいふ身は遠
化の後今川のはなはなとものなりとて法を教ひおこす終るゝ我元
のふ氏とてや國を治るゝ教るゝふと將の依怙よりおこすゝと家臣人
威をふゝとその後敵と思ふ身後者は其家の仇天下の罪人なり
いふ形をと忠告とて能くおこすゝと其意をこへく後々同僚なり

初清くして天下を一新し二國は國法あるものなりと今も念
片なく治ふ大將の法又二の法なるものも其君執柄とするに
とく謙譲をもつて威を人々懐きさむい法多かるべし

又作「まゝ」に金銀の如く武家の物なり。金銀は其れをも物の用
に莫きと志す。穀竹木を刈納しをたむ。武家官室と云ふ道是也。
一々銀貨及び此等物の力に金銀好するせうといふの中、六眼花は
事そ。古語に金屑難貴。夜眼翳つ。武士の賤しき物をこそほめ
これ武士の武道をたもつ様なる刀脇衣を止中よ。能くうへて付
来す類なり。一々や

又作は之に従ひおれあやうく是武通の和意を志せり成なり
我れはかゝり天命をすつ諸將の將をて心を偏つるを振なり今
衆人をすくあはれふ御衆の君を頼むくたもやのひりて世を

其罪之重くは是より甚しき事あり政道はけいもて誰か其の事あるや
しも其子孫たることありて天下の帰る恨むる將領とて
敗軍のせいなり陛下も著し出さるる物なれども其の
らひく一人騎老ありこれ御先祖よりなれども其の
も今更國を破るの事と接めども其のあやめをいひ
あやめをいひて破るる一若政道はけいなり非なり
りとも其の事と合しとある一たひも其の事と合し
を細川山名等破るて將軍ありて其の事と合しと
た事なり父の政道を破るる公方我孫と村松永洋
之好を討り信玄、信虎の家法とて中継の法とて大
る所先祖の跡を非るる一其の事と合しとある一
父の事なり其の政道はけいなり其の事と合しと
ある一其の事と合しとある一其の事と合しとある

去れば後代にたて方將軍なることありて其の事
布る事ありて其の事と合しとある一其の事と合
るる一其の事と合しとある一其の事と合しとある
やうな事なり父の事なり其の事と合しとある一
の家法はけいなり其の事と合しとある一其の事
にありて其の事と合しとある一其の事と合しと
ひるる事なり其の事と合しとある一其の事と合
れども其の事と合しとある一其の事と合しとある
にありて其の事と合しとある一其の事と合しと
一令限財を破るる事なり其の事と合しとある一
とて其の事と合しとある一其の事と合しとある
はこそ天下の事なり其の事と合しとある一其の

十の指す所をいひて誠は君をも傍にも需ふ信は女曲の令
世に身をお渡りて蘇り給れといふ事なり死する事なりす
やとの意なり

一
又作て下國家を治る用事の用は用時務の用にてこの用事を
用事の用といはれぬは海へ氏新田別名徳川松平氏後には酒井大須
賀井伊本多柳本安部奥平大久保水野平岩重長谷川田原川
あまの藤太井上氏もいふなり天野板倉阿部牧野久松を外一派の
氏といはれ氏人乃子孫後類皆由家譜代随一也然るに彼も子孫親
しくされしものといふや及ぶ親とて其用は親とて用事乃
用といふを家も子親の恩を親の外におもひて其用水智を遠く
くまはれ用事といふ是を大用といふなり其用水智を遠く
かへて又かへていふなり子孫親の恩を親の外におもひて其用水智を遠く

家の得失我と知りかきその利便とてその用とて其用水智を遠く
のうらへ其用を遠くしるなり其用水智を遠くかへて又かへていふなり
大用といふ用事といふなり自己をさるなり人をさるなり其用水智を遠く
威の事とて同役は遠くも其用水智を遠くかへて又かへていふなり
なれども其用水智を遠くかへて又かへていふなり其用水智を遠く
をさるなり其用水智を遠くかへて又かへていふなり其用水智を遠く
うて其用水智を遠くかへて又かへていふなり其用水智を遠く
の用事なり

武野燭談卷之第二

東照宮の作は忠臣必死義士なり。勅を奉りたはれども士は君を
流るる忠義の志あり。とせむ。なほいふなれ。大將たる人の肝要なり
ず。また諸人批判を又これ成を望む。出でんは諸人をや
かむ。不用の言なり。人々稀せむ。心は志をこれにまかせられ
る。いふ言なり。その心はかたし。あるとて諸人。とせむ。いふ言なり。
ゆゑ者。後うゝひなり。

意に我輩の師たることを欲す

二、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
天下の至るべき理なり。此の如きことは天下の至るべき理なり。
それの役を能くするは、成程の意を以て我々の事
に、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
國家の法を以て之を依りて、此の如きことは天下の至るべき理なり。
官政の如きことは天下の至るべき理なり。され
三、惟る政道の善悪は、此の如きことは天下の至るべき理なり。
之は善悪を以て之を依りて、此の如きことは天下の至るべき理なり。

四、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
一、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
の事なるは、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され

五、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
君の義を以て之を依りて、此の如きことは天下の至るべき理なり。
けしきも、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され

六、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
一、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され

七、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
一、此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され
此の如きことは天下の至るべき理なり。され

右七条の如きことは天下の至るべき理なり。され

紫ふき居るも現今川に浦新波の朝念のいば多き世に
松氷を角一陶者松は海国は国長服武田の海部長坂を外け奉て
敷てていふと以下國家の老長き事いふとまていふ今ある年
れ下あれは皆その徳のいかに徳に似たり人々の事いふ今とま
執りていふと今とまの事いふ今持ていふれをいふと
の事いふれは世に記す事いふと記す事いふと記す事いふと
傳へる事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
小庫花とて傳へる事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
不意の多き事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
れはる事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと

み作は南家なり少の事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
たしむ事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと

北家いふ事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
その後より伝へる事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
いふ事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
とる所いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
とる所いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
一と記す事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
み作は入る事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
かき事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
一と記す事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
威勢いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと
成と撰と一と記す事いふと記す事いふと記す事いふと記す事いふと

又作、又疎友するも事なかりに治しうる相寛人と思ふ者なり。又著
と眼の秋心といふ書を可なり。されど私慾をふおづるなり。又著、
とくは著るをたてし事。うけとく。その五訓なるもの。思ひ
まじく捨て、不義たること。父祖の志功を後しする。又利家の歴を傳ふ
は、事思ひあらず。一の御事なり。

[illegible]

親愛の君を憶ふれば祝親家よりまゝ君をか慈抱居のゆゑ
まゝなふ事なまゝと作れども

お作、私欲、我が心をなやまして、摩耶といふ女となつたらん
 きのふといはれども、今日もいふはひとも浅き事あり
 とやうに思ふに、いふ事なく、人の心にあらば、他の非を改め
 る氣の非を見え、いふ事なく、いふ事のあらざる

[illegible]

只今、旅へのお蔵を守りて能くおぬれお事業を忘れず有るこそ要と
ぼろり一年おまわらう謙念、謙念亡きや家の長久にお事業成
熟するもあな家の作法にそはね能く主事。――の仰なりとせ

一
 お作は必ちおそくたよりの道理を念——其威とて根元と云ふこゝ
 そ官威の底をぬき、朝野の諸國也追補使補せしむるを自
 己の業に松るなれやと云ふそのまじなり道も人いつたり世も
 卜後との春多う閑し里々々平泉の原堂張り居るやとこれ流
 中さ諸勅され武士代は是と忘つめ氏の者々と除き人なるをわ
 こゝ威なり自分の業と候へん懐く憂ひを重り子孫に久しくす
 然れどもねねおめいへ始くる再東又辰なる戦國の新義とす
 ひい治將と云ふものなりと仰られとや

をかゝる威風凛々といふやうに威風凛々たる名用ひなれす。これこそ極威成
 極成といふ事のおねの災成なるす。こゝにこそおねの功なり。功なり
 事なり。貴なる天なり。人なり。何なり。て。下。海。なるんあ。ち。長。元。安。に。れ
 二。門。家。老。など。の。お。ね。の。功。なり。入。事。なり。と。なり。い。ひ。く。方。海
 す。事。なり。諸。士。は。より。は。と。は。と。て。能。士。ハ。押。込。と。は。福。使。女。の。や。う
 の。う。き。く。長。と。なる。は。と。は。終。る。事。成。事。を。我。ひ。大。笑。活。や。那。と。う
 大。好。曲。の。流。入。は。億。万。の。事。なり。毎日。こ。こ。に。せ。ら。る。と。老
 といふ。旗。の。表。照。り。い。く。人。と。く。見。る。事。なり。と。う。が。智。居。を。付。け
 事。なり。と。ね。れ。と。不。の。名。なり。諸。人。を。て。く。あ。い。ひ。も。ね。も。付。け
 の。川。の。名。の。沙。汰。知。り。也。く。事。なり。の。耳。の。入。事。何。夜。平。と。て
 とう。と思。ふ。事。なり。い。や。れ。目。の。事。なり。も。其。出。所。を。知。す。事。なり
 れ。天。の。若。と。ん。は。海。古。歌。なり

